
渴く

小宮山蘭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渴く

【Nコード】

N7131M

【作者名】

小宮山蘭子

【あらすじ】

砂嵐が吹きすさんでいた。私は、荒れた長屋が連なる小さな村にいた。ここは何処だろう？ 私は誰なんだろう？ 決して断ち切ることでできない宿命の輪 罪と罰の連鎖に身をよじりながら、私が味わう永遠の恐怖。

(前書き)

「夏のホラー2010」百鬼集帖」参加作品です。

乾いた風が、通りを吹き抜けていた。

舞い上がった砂が、眼を刺し、唇に張り付き、鼻孔の奥深く入り込んだ。喉や舌にまでざらざらとした砂塵が流れ込んでくる。私は咳き込みながら何度も唾を吐いた。

両の手で顔を覆いながら薄目を凝らすと、そこには、絵に書いたような古い長屋が連なっていて、通り沿いには小さな川が流れている。けれども、どの家も硬く門戸を閉ざしており、通りにも川辺りにも猫の子一匹見当たらない。

土手の上では柳が風に激しくなびき、幾重にも層をなした黒い雲が低く垂れ込めていた。雨粒でも落ちてくればこの砂嵐は止むのだろうが、雲はただ威圧的な面持ちでうごめいているだけで、いつこうに降り出す気配はない。

初めての町だ。いや、村と言った方がいいかもしれない。が、私は自分の名前すら思い出せずにいた。ゆえに、この村が未見の地だという確信はなかった。

いずれにせよ、口の中の不快感に耐えられなくなっていた私は、水を恵んでもらおうと、恥を忍んで一番端の家の戸を叩いた。

その瞬間、私ははたとあることに気づき、愕然とした。

それまでおぼろげに感じていた、言いようのない違和感。説明のつかない、不気味な静寂。その正体　私の耳は、何も聞こえていなかったのである。

この手が戸を叩く音も、木造長屋が軋む音も、風の鳴き声も、自分自身の咳き込む声すら。

耳を澄まし、「あー　あー」と声を発してみたが、やはり聞こえない。

今度は体を前かがみにし、力の限り叫んでみた。けれど、喉仏の辺りが鶏のように筋を立ててひきつっただけで、何も変わらない。

無音の世界。

大きく口を開いてしまったため、今度はたくさんの砂がどつと入り込んできた。激しい吐き気に襲われた私は、地べたに突っ伏し、大量の砂を吐いた。

四つんばいのまま土手まで進み、転がるように滑り落ちる。心の中で、「水、水……」とつぶやきながら、川の水で喉を洗おうと身を乗り出した。

そんな私を、さらなる戦慄が襲う。澄んだ水を湛えているはずの小川は、すっかり干上がってしまった。黄土色の川底には細かく裂け目が這って、どこもかしこも紙のようにグニヤリとめくれあがってる。

その時、誰かが肩を叩いた。振り返ると、そこに一人の男が立っていた。

男は小人症だった。深い皺が刻まれた大きな顔。肩幅の狭い塊のような体から短い手がぶら下がっていて、垂れた目は濁り、唇は乾いてひび割れていた。

男は目をそらし、体を起こして遠方を見た。

その視線の先に、一隻の無人の船があった。ゆっくりと、こちらに向って来ている。

木で作られた簡素なそれは小さく、古の川渡し船のようだった。そしてそれは、干からびた川面を、まるで水の流れに押されるように滑らかに進んでくるのだった。

いつのまにか風は止んでいた。重苦しい静寂の中、私は体が固まっってしまった、動くことができなかった。生唾を飲み込むと、舌の奥が砂粒でかすかに痛んだ。

やがて、船は私の前ですっと止まった。

恐る恐る中を覗き込む。

するとそこには、人形とも人間ともつかない、おぞましい姿の女が横たわっていた。

乾いた川底そのまま、女も体中の水気を吸い尽くされたように干

からび、ミイラ化していた。皮膚は灰色に近い色で、体は、まとった服が泳ぐほど縮こまっていた。大きく縦に開かれたままの口。折り曲げられ、胸元で空を搔くように止まっている皮と筋だけの手。変形した長い指。そして、宙の一点を見据える黒眼。

生前の顔つきを想像するのは困難だ。けれども私は、この女を知っている。そんな気がしてならなかった。

しかも、この女がミイラのようになっているのは、体中の血が全部流れ出たせいだと、心のどこかで覚知していた。

と、ふいに意識が遠のき、船に持たれたままの格好で、私は気を失った。

かび臭い匂いが鼻をつく。

目を開けると、私は、薄汚れた煎餅布団せんぺいに寝かされていた。

慌てて体を起こす。すぐ脇の土間どまで、あの小人症の男が火を起こしていた。

目を覚ました私をちらつと見て会釈すると、また黙々と釜に薪をくべ続けた。

砂嵐の村にいたのは、夢ではなかったのか？ 私はここでなにをしているのだろうか？

私は、誰なのだろうか？

あいかかわらず、耳は聞こえていない。

口の中では、砂がジャリジャリと歯に当たる感触が伝わった。少し眠ったことで、喉の渴きも強くなっていた。

私はよろよろと土間に近づき、小男に向かって水を飲むしぐさをし、続いて手を合わせた。けれども、彼は首を横に振った。

どうしてだ？

釜の横には、満々と水をたたえた甕かめが置いてある。小男の肩のところまである、大きめの甕だった。たった一杯でいい、一口でもいい、それを柄杓ひしゃくですくって、飲ませてほしい。

私は甕と柄杓を指差し、もう一度拝むように頭を下げたが、小男は首を振るばかりだった。

私は、土間に飛び出して自ら柄杓に手を伸ばした。だが、小男は血相を変え、甕にしがみつき、頑として私に引き渡そうとしない。

私はカツとなり、手にした柄杓で小男を殴った。その額が割れ、彼は甕を抱いたまま地べたに倒れた。衝撃で甕が砕け、せつかくの水が全部土間に流れ出でしまったので、私はますます憤慨し、小男に馬乗りになってその顔を柄杓で何度も殴りつけた。

竹の柄杓は壊れ、むき出しになった鋭い切っ先が小男の頬や目を刺した。

やがて、小男は、ぐったりと動かなくなった。私は肩で息をしながら、仰向けになっている彼を観察した。不思議なことに額や頬の傷はまるで野菜でも切ったときのようにぱっくり口を開けているだけで、血は、にじみもしない。

その傷口までも水気を放棄していることが、ただただ腹立たしくてならなかった。

こぼれた水は汚れた地面に溜りを作っていた。しかも、倒れた小男の体が浸っている。いくら水が欲しいからといって、そんなものを口にできるか。

が、私はすでに、まともな感覚を失くしていた。迷う余地などない。背に腹は変えられない。このままでは、私自身があの川底や女のように干からびてしまう。自らに言い聞かせ、その水を飲むことにした。

手を突き、顔を近づける。すると、どこからともなく一匹の鼠がそろそろと這い出てきて、私の向かい側で、私よりも先に水溜りに口をつけた。

次の瞬間、鼠は激しく体をよじり、横になってバタバタともがき始めた。

私は息を呑み、体をのけぞらせ、尻餅をつく。鼠は泡を吹き、あつという間に事切れてしまった。

毒？！

何にせよ、この水を飲むわけには行かない。

目の前に水があるのに、飲めない。それは、荒れた砂にまみれ、ひび割れた川底に目を奪われたときより、苦しかった。

私は小男の家の戸を開けた。

すると、ものすごい光と熱がなだれ込んできて、一瞬、目がくらんだ。

厚雲も砂嵐も去り、今度は灼熱の太陽が照りつけていたのだ。強い陽射しと地面から上がる熱気が、渴ききっていた私をさらに痛めつける。

私は、隣の家の前に立ち、その戸を叩いた。とにかく水をもらって口を潤したら、こんな村はすぐに出て行ってやる。

だが、どんなに叩いても、誰も出てこない。その隣も、そのまた隣も 何軒も回ったが、結局どこも留守だった。

川は干上がったままだ。息が乱れ、脚はもつれた。舌や歯茎には砂がまとわりつき、右手には男を殴った感触が克明に残っていた。熱した鉄板のような路面に裸足の裏が焦がされ、あつという間に火ぶくれができた。

猛暑のせいで汗を噴出し、脱水状態はさらに悪化していった。空からの熱射は、もはや凶器だった。

「水……」と、何度も唇を動かしながら、私は川原に下り、喉元を抑えて土の上に倒れこんだ。

太陽はジリジリと身を焼く。動悸が激しくなり、もう指一本までが重く感じられて、動くことができない。このまま私は、ここで息

絶えてしまつのか？

そんな極限状態の脳裏に、ふとよぎった言葉。

「佐吉は、死んだのだろうか？」

佐吉？

その刹那、様々な場面が頭を駆け巡り、私は芋づる式に思い出したのだ。長屋も、あの小男も、以前から知っているのだと。

そう、小男は、“佐吉”という名だった。もって生まれた奇怪な風貌ゆえ村八分に逢い、皆から疎まれていた。村長だった私の父が彼を不憫に思い、墓守として雇ってやり、この荒れた長屋の一角に寝起きする家を与えたのだ。

私は、跡取り息子として両親から溺愛されていたが、流行病の高熱が原因で聴覚を失ってしまつてからは、皆、弟の秀二ばかりを可愛がるようになった。秀二はまだ十三だが、器量も性格も人好きし、私などよりずっと将来有望だった。以来、私は家の中でいつも肩身の狭い想いをしながら暮らしていた。

なんのことはない、すべて、現実だった。私はほんの一時^{いっとき}、記憶をなくしていただけだった。耳が聞こえないのも、佐吉を殺してしまったのも、夢や幻ではなかったのだ。そして、この村に逃げ込んだのも……

それならば、あの女の屍は？

船はもう、跡形もなく消えていた。

あの女がただの幻覚だったなら、それでいい。すでに、狂気の中にいる私だ、追い込まれた状態で化け物の幻に出会つたとしても、今さら驚くことはない。

だが、私はあの女を、よく知っている。そんな気がしてならない。あの時私は、佐吉のことを思い出すより先に、あの女がこの侘しい村とは無縁であり、遠き地で非業の死を遂げた者であることを認識できていたのだ。

といつて、すべてが見えたわけではなかった。あの女がどの誰だか、確かめたい。けれども今となつては、それを知る術はない。

だからもう、あの女のこととは忘れようと思った。そんなことはもうどうでもいいと、言い聞かせていた。

私はまもなく、この川原で、このまま命果てるに違いないのだから。

急激に眠気が襲ってきた。ああこのまま、私は二度と目覚めないかもしれない。そう感じた瞬間、私の意識は何かに吸い寄せられるように、遙か彼方へ飛んで行った。

陽はとつぷり暮れ、夕闇が街を包んでいた。高層ビルの谷間に、家路を急ぐ人の波が賑やかにうねっていた。

一人の女がオフィスを飛び出し、人を追い越しながら小走りに駅に向かっていた。

女は今夜、恋人と逢う。

おろしたてのヒールは歩きにくく、女は何度も足元に目をやったが、その実、すべては上の空。靴のことなど眼中になかった。

女が、恋人に妊娠を告げたのは、先週のことだった。

「お願い……どうしても産みたいの。迷惑はかけないわ」

女が祈るような眼差しでそう言うと、男は苦渋に満ちた面持ちで彼女を抱きしめ、

「どうしても？」

と、尋ねた。

「どうしても……」

「少し考えさせて」と、男は言った。

女はため息をつく　仕方ない。彼が喜んでくれないのは、最初からわかっていたもの、と。

男には、家庭があつた。許されない恋だつた。けれども女にとっては、かけがえのない愛　こんなに深く人を愛したのは、初めてだつたのだ。

男もまた、「妻より君を愛している」と、何度も彼女に告げた。二人は強い絆で結ばれていた。

しかし、男とその妻の間にはまだ幼い子供がいた。女は、子供のために彼が離婚に踏み切れないことは承知していたし、罪のない妻子を苦しめ、周囲を失望させてまで、男を略奪する気はなかつた。

ただ、これからもずっと二人で逢えるなら、愛し合うことができると　女はそれだけでいいと思つていた。

そんな中での妊娠は、思いもよらぬことだつた。女も最初は衝撃を受け、男に打ち明けることさえ憚られ、思い悩んだ。それでも、心の隅で煌いたかすかな喜び　愛する男の子供を産む　それは日毎大きくなり、やがて、確かな決心へと移り変わつていた。

認知は望まず、養育費も求めず、秘密はすべて胸のうちに抱き、女は一人で子供を育てるつもりだつた。

昨夜、女のもとに男から電話があつた。

「気持ちが変わらないね？」

「ええ」

「わかつた」

男は一呼吸置き、「産んでいいよ」と言つた。

「本当に?!」声を震わせて何度も問う女に、「うんうん」と頷き、「明日はお祝いしよう。いつもホテルばかりだから、ドライブでもしようか。夜の海でも見に行こうよ」

足早に歩いてきたため、息が上がつた。軽い喉の渴きを覚えた彼女は、コンビニでミネラルウォーターを買おうと立ち止まつた。ほ

同時に、背後でクラクションの音がした。

振り返ると、見慣れた車があった。ドアが開き、男が降りてきた。「遅いから心配になって」

その柔らかな笑顔が、女の胸に染みだ。

「ごめんね」

彼女はコンビ二には寄らずに、助手席に滑り込んだ。

女が、危ないから低いヒールに変えたことや、ほんの少しつわりらしきものが始まったことを告げると、男は「そう」と横顔のまま返事をした。

「ねえ……本当にいいの？」

女があらためて不安気に尋ねると、男は、

「いいよ。嬉しいよ」

と、やっと女の方を見て、笑った。

車は高速に乗り、それから一時間も走り続けた。やがて、喉の渴きが蘇った女は、窓の外を流れていくオレンジ色の光を見ながら、「やっぱり飲み物を買っておけばよかった」と、思っていた。

たどり着いた夜の海。

二人は小高い岸壁から、黒くうねる波を見ていた。高い空に雲をまとった満月が浮かび、遠くに灯台が光っていた。

女はつないでいた手をほどき、両手を広げて深呼吸をした。

「綺麗だわ。ロマンチックね。それに、夜の潮風って、案外気持ちいいものね」

「ああ」

風を吸い込んだことで、口の中はますますカラカラになった。

「なんだか、喉が渴いちゃった」

女がそう言って振り返った瞬間

ズン！！！！

その胸に、焼けるような激痛が走った。

「?!」

男の手元で、鋭い刃物がギリリと光った。

「喉の渴きなんて、すぐに気にならなくなるよ」

男は続けざまに、女の喉も切り裂いた。

「そ……んな……う……そ……」

女のブラウスの中では熱いものが大量に流れ落ち、首からは噴水のような飛沫めいすいが上がった。

「悪いね、やっぱり、困るんだ」

男の薄ら笑いが、月明かりにくつきりと照らし出された。

女は男につかみかかろうとするが、体に力が入らない。血は止まらない。月をも赤く染めようとするかのように、シューと音を立てて、喉元から勢いよく吹き出ている。

「この海にはね、小さな鮫がたくさんいるんだ。君の血の匂いがかいで、彼らがやってくるよ。そして、君はあとかたもなく、いなくなるんだ」

痛みよりも恐怖よりも、強い哀しみが体の奥からせりあがってくる。

「い……や」

やがて男は、よろめき倒れそうになった女の手を素早くつかむと、その耳元で甘くささやいた。

「バイバイ」

そうして、女の血に染まった体を、海に向って放り投げたのである。

“ 喉の渴きなんて、すぐに気にならなくなるよ ”

私がもうすぐ死んでしまうから？

それとも、たくさんの海水を飲み込むから？

ずっとずっと、あんなに欲しかった水

それは、鼻や口や肺にまで一気に押し寄せてくる。

なのに、血はますます勢いを増して、海の中に流れ出ている。

真つ暗な海の中で、ゴボゴボと鈍い音を立てながら、私は手足をバタつかせる。

もう水なんて要らない。

私が欲しかったのは、コンビニのミネラルでも、冷たい海水でもない。

思い知った この「渴き」は、どんなにもがいても永遠に止むことはないのだ、と。

やがて、私の体はぜんまいが切れるように動かなくなり、闇に落ちていった。

海は、月光に照らされてキラキラと光っている。

そこに、一艘せうの小船が浮かんでいる。

私はその船の上に、疲れ果てた体を横たえているのだった。

何も聞こえない、静かな夜の海。

何も聞こえない 波の音さえも？

そしてやっぱり、渴いていた。

ねえ、二つの命を乗せたこの船は、いったいどこに行くの？

私は、再び酷暑の川原で意識を取り戻した。

「まだ生きていたのか」

私は自分をあざけるように笑い、たった今体感してきたあの女の死を、何度も胸の内に思い描いていた。

体中の水分は汗となって全て出てしまったのだろう。口の中には一滴の唾液さえない。浅く行きかう呼吸が、ますます渴きを増幅させていく。

一方で、思考力だけは一層研ぎ澄まされている。私にはもうすべてが理解できていた。じわじわと死に近づいていく感触がいたぶるように精神を蝕み、人を殺めた後悔は体内で沸騰する五臓を締めつける。

さらに、私は知ってしまった。自らの宿命を。

あの女は、殺された。私は 殺した。

けれど、女を殺したのは、私ではない。私が殺したのは

私が殺したのは、佐吉だけではない。

私は今朝、弟の秀二を手にかけてのだ。

まだ大人になりきれしていない秀二の体は華奢やせで、私よりもずっと非力だった。その秀二を風呂場に誘い出し、浴槽に顔をおしつけて溺死させた。

耳が聞こえないことをこの時ほどありがたく思ったことはない。

秀二の悲鳴も、水面に沸いてでる不気味な泡の音も、一切聞こえなかった。すべてが幼い時に見た無声映画のように通り過ぎ、私は他人事のように無感情に、あっさりと弟の命を奪うことができた。

秀二は鼻や口から水混りの薄い血を垂れ流し、白目をむいていた。その呼吸が止まっているのを確認すると、私は裸足で家を飛び出し、当てもなく歩いた。

乾いた風が砂を撒き散らす中を、村の隅にひっそりと佇む、あの長屋にたどりつくまで。

これまでのことは、すべて秀二や佐吉の呪いなのだろうか？
それとも、人智を超えたところにある神秘的な何か、私に罰を下しているのだろうか？

一つだけはつきりしたことがある。あの女は、他の誰でもない私だったのだ。

私はまもなくこの川原で今世の生を終え、来世であの女に生まれ変わるのだ。

そうして、最も愛する者に裏切られ、宿した赤子ごと幸を奪われ、渴きながら、溺れ死ぬ。殺す側ではなく、殺される側になることで、贖罪するのだ。

干上がった川で見たミイラは、いつの世でも渴きに身をよじりながら最期を迎える私の業そのもの。

いよいよ迎えた最期の時、私は目を閉じ、ぼんやりと考えていた。私に殺された秀二と佐吉は、前世では誰かを殺していたのかもしれない。

女を殺した男は、来世では誰かに殺されるかもしれない。
誰もその宿命に抗うことはできないのだろうか。

やがて、私も漕ぎ出す。渴きを抱えたまま、私の船に乗り。
船は、乾いた川を進んでいく。

ああ……この船を曳航えいこうするのは、いったい誰なんだろう？

渴望に終わりはない。痛みや苦しみも際限なく、罰の連鎖は決して朽ちない。

罪人に本当の死は訪れず、彼らは永遠にもがき続ける。

人はそれを、「地獄」と呼ぶ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7131m/>

渴く

2010年10月10日06時25分発行